

## 戦争体験語り手のネットワークづくり 事業報告

2010.12. 25

NPO 平和のための

戦争メモリアルセンター設立準備会

### I. 総論

#### 1. 活動の目的

当 NPO の最終の目的は平和に寄与することです。その最終目的を達成するための多くの要件の中に、戦争という「負の遺産」を確実に受け継ぎ役立てることがあり、その方途を具体的に実行する必要があります。一方では、資料館を運営し広く一般に展示資料を公開していますが、本事業ではもうひとつの有力な方途である「戦争体験を語りつく」ということ、つまり人から人へ、資料館から踏み出して外へということに取り組みました。

戦後 65 年を経過し世代交代が進み、戦争の記録・実物資料は失われ、戦争体験者が高齢化して記憶も年々薄れてきています。特に戦争体験者の語りを直接聞けるチャンスは、ここ数年に限られています。一方、ピースあいちへの来館者は、学生・生徒が多く、増加傾向にあります。また、戦争体験の語り手派遣は、地域での交流と学校などでの平和学習に役立つとの手ごたえを得ています。

こうした状況判断から、戦争体験の ①語り手の力を集め ②語りの場を増やし ③語りを記録し ④語り継ぎ手を養成し、戦争の記憶を組織的・永続的に継承するネットワークを整えることを、活動の具体的目的とします。

#### 2. 活動の内容と成果一概要

① 2009 年 7 月に結成した「ピースあいち語り手の会」を中心に戦争体験の語りのネットワークが 2010 年 1 月に本格的に活動をはじめました。

2010 年 6 月、それまでの経過報告・反省、意見交換、至近の予定の周知、会員相互の交流、「語り」の研修のため、「ピースあいち語り手の会」は第 2 回例会を開催しました。2010 年 1 月以来の 10 ヶ月間の活動につき、下記します。

② 「語り手の会」の活動準備期間に約半年を要しましたが、愛知県・名古屋市の「戦争に関する資料館調査会」の支援を得て、2010 年初から県内の公立小中学校等への語り手派遣活動が本格的にはじまりました。その結果、学校およびその他の団体へ 2010 年 10 月までに派遣した件数は 22 に達しました。また「語り」を聞くことを

希望して来館した学校・団体は21ありました。人数でみると10か月間に2,800人余に戦争体験の「語り」ができました。学校からはお礼の手紙を添えて、生徒たちから感想文が届いています

なお、11月以降2011年2月までの「語り手」派遣、あるいは来館して「語り」を聞く希望の申込が既に16件（参加予想800人）あります。

- ③ 戦争と平和の資料館 ピースあいち では、これまでも終戦記念日前に「戦争体験語りシリーズ」（10日間連続）を行ってきました。

この場での聞き手は小中学生に限らず来館した不特定の人びとになっています。高齢者は自らの体験を思い出して、中年の方は親から聞いたことがある話に重ね合わせ、若い人は初めて聞く戦争体験談に身じろぎすることなく、聞き入っていました。戦争体験の「語り」が家庭内の日常から消えて、特別な機会・場を必要となってきたことを、示しています。

- ④ 「語り手の会」の活動として手記を残すことも進めました。これらの活動と並行して開催したピースあいち3周年特別展「名古屋空襲を知る—いま平和を考えるために」に呼応して名古屋市民から空襲体験手記を一般募集し、21人からの投稿を得ました。「語り」の場で最も多く要望されるテーマである「名古屋空襲」に至る世界の空爆の歴史を皆で学習するため、講演会も開催しました。

- ⑤ 「語り手の会」会員の手記と市民投稿の手記とをまとめ、2010年10月に冊子「語り継ぐ私の戦争体験」を貴財団のご助成により発刊し、ひろく配布することができました。この冊子の読者と寄稿者との間で交流が始まることを期待しています。また、この10か月間に「語り」の映像20本を収録できました。この映像は、他への「語り」の紹介用に、「語り手」不在時の聞き取りに、また「語り継ぎ手」の学習素材として、今後活用されることでしょう。

- ⑥ 「語り」「手記」の内容は、空襲・原爆の被災、学徒動員、学童疎開、戦場体験、引揚げ、軍隊生活など多岐に及んでいます。活動域は名古屋市の他、岡崎市、蒲郡市、安城市、刈谷市、東海市、江南市、あま市などで、これからは半田市、稲沢市、愛西市と、県下一円に広がりつつあります。また学校によっては、カリキュラムに組み込んで毎年来館し、リピーターになってくれるところも出てきました。

- ⑦ 「語り手」の方々は思い思いに工夫（原爆被災体験の紙芝居、防空頭巾にモンペのいでたち、焼夷弾とヘルメットの紹介等）を凝らし、思いを伝えようとしています。ピースあいちには3千点余りの実物資料を保管していますので、それらを活用し、「語り」とセットでの展示会も開催しました。

「語り」の継承と、理解を助けるために、手記、映像記録の他、防空壕（模型）を制作しました。こうした活動を知った市民から焼夷弾被弾の天井（実物）の寄

贈の申し出があり、館内に移転し保存することができました。これらの費用負担は貴財団のご助成でまかなうことができました。

- ⑧ NPO 平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会は、国際協力も活動項目に掲げています(定款4条)。ピースあいちには、今年になって10月までに韓国、アメリカからの来館がありました。年内には、イラク、カンボジア、ルワンダからの来館が予定されています。5月に来館した韓国の高校生たちには日本の平和憲法や徴兵制がないことに、驚きと羨望を与えたようでした。外務省の招待で来日し9月に来館した元アメリカ兵捕虜には、語り手も面会して相互理解の場を持つことができました。これからますます国際交流の機会が増え「語り手のネットワーク」が、国際的になって行くと期待されます。
- ⑨ 手記・映像に加えて、語り手の心を伝える語り継ぎの「技」の学習を兼ねて、8月には俳優による朗読会を開催しました。

以上のように、いろいろな活動を有機的に組み合わせ、「語り手のネットワーク」の活動を組織してきました。当面の目標は ほぼ達成した と判断します。

### 3. 今後の課題

当面の目標は達成できましたが、この活動は永続的でなければなりません。また、活動は著についたばかりで、深まり・広がり追求、内容の善し悪しの吟味は、未だなされていません。今後の課題として、以下を挙げます。

- ① 愛知県内での深耕と周辺への展開、 現在の来館者・語り手派遣要望先は、ほとんどが愛知県内ですが、三重県、岐阜県、静岡県、滋賀県、長野県南部、に広げること、愛知県内の深耕とともに、大事な課題です。
- ピースあいちの所在地は東名高速道路名古屋インターチェンジに近いので、1時間で来れる範囲は他県にも相当広がっています。もっと利用していただけるように、仕掛けることも私たちの課題です。
- ② 外国へのチャネル確保、 現代及び将来の戦争と平和を考えるには、外国人との交流が不可欠です。ことに最近では緊張が高まっているといわれる東アジア諸国の民との相互理解は大変重要な事項です。先の戦争で日本が残した「負の遺産」を直視して、歴史認識のギャップを埋める作業が求められています。日本が戦争中に他国に被害をあたえた事実を知らない日本人、日本の戦後の平和への努力を知らず警戒する他国の民、との間のチャネルづくりが必要ですが、彼我の「語り手」交流の場をどう確保するかが、課題となっています。
- ③ 語られた内容の吟味検討、 これまでの「語り」が全て将来に語り継ぐに値するものとは限りません。具体的であることは強みですが、個人の体験に終始し一般

性がなく全体の認識を狂わせることもあります。反対に抽象的にすぎると、実体を想像できなくしてしまう恨みが生じます。「語り」をそのままオウムのように伝承するのではなく、吟味・検討・再編することが課題となります。

- ④ 次世代への語り継ぎ手の養成、 正規に語り手の会に登録頂いているメンバーは、最高齢者で96才、最も若年者でも70才に達し、多くは75才から85才の方々です。5年後を想像すると、語り継ぎ手の養成が大変さしせまった課題であることが分かります。いま60才から65才の方、あるいはそれ以下の方の「語り継ぎ手」を養成することが大きな課題です。
- ⑤ 派遣コストを吸収できる財務体質の強化 語り手を派遣する場合、ご高齢の方に遠隔地に行くことをお願いするので随行者が必要で、交通費の負担が重くなっています。お聞きいただく方々にご負担を増すこともできず、これまでは多くの方が自弁したり、お渡ししても受け取らずにカンパしていただく例が多く見られます。これは民設民営の資料館で維持が経済的に厳しいからです。しかし、個人の好意に甘えては長続きできません。NPOの財務体質の強化が課題です。

今後ともこれらの課題に取り組みますので、ご指導ご支援を切にお願い致します。

## II. 各論—活動の内容と成果の説明—

- ① ピースあいち語り手の会の結成。 2009年4月結成準備を開始し、7月に結成総会を開催しました。ピースあいちの運営委員が、代表、事務局長に選出されました。会の目的を「戦争体験者がますます少なくなっていく今日、先の戦争を知る者が次代の人びとに戦争の悲惨さ、愚かしさと平和の尊さを伝えるために、相互に連携して戦争体験を語り継ぐ活動を行うこと」としています。

結成を知った100人を超える人びとから、活動の打診がありましたが、それぞれがご高齢であり、体調も勘案し、最終的に正規のメンバーとして登録頂けたのは47名でした。在住地は、東は豊橋市、岡崎市、豊田市、西は一宮市、稲沢市まで名古屋市を中心に愛知県下全域に広がっています。2010年10月現在の会員数は82名となっています。

【参照 毎日新聞 09.7.28 記事「語り手の会」誕生】

会員の戦争体験は、文字通りめいめい異なり、戦争が市民に与えた災いのひろがりのほどが分かります。空襲、原爆体験、学徒動員、学童疎開、戦場体験、軍隊体験、抑留、捕虜体験、引揚げ、傷病兵士看護、銃後生活などがあります。

- ② 「語り」の要請と場の拡大 小中学校で行う平和学習を支援するため、県市の「戦争に関する資料館調査会」からの要請により、2009年度以降、語り手の会メ

ンバーの派遣を本格的に開始しました。これまでは、ピースあいち への来館していただくことを原則として、例外的に個々の学校から特別な要請がある場合に限り、ボランティアスタッフが出張する方法で対処してきました。従ってそれに比べ、「語り」の場は格段に広がっています。しかし、派遣の増加が広がると来館者の減少に繋がりがかねない、という心配も生じています。

学校のほか、人権平和活動団体、労働組合、生涯学習センターなどがありますが、東海市青年年会議所のイベントへの派遣要請が特筆されます。今後も他地域の青年年会議所からの申し出があることを、期待されます。

- ③ 戦争体験語りシリーズ ピースあいちの1階フロアで「戦争体験語り」シリーズを、8月3日から14日までの10日間連続開催しました。語り手は「語り手の会」会員で、内容は、空襲と学徒動員4件、学童疎開1件、戦場体験3件、捕虜体験1件、空襲と大地震1件でした。聞き手は当日来館した不特定の人びとであり、この場には時間の制約はなく、質疑応答が自由にでき老若交流の場になりました。

- ④ 3周年特別展示のための学習と「語り」 最も多くの方が身近に体験した「戦争」は空襲であり、よって「語り」要請が最も多いテーマは空襲です。ピースあいち開館3周年を期に2010年5月～7月に特別展「名古屋空襲を知る—いま平和を考えるために」を開催しました。展示の構成、パネルの記述内容は、調査研究チームが担当し、学習しつつ自作しました。この作業を通じて20余名のボランティアスタッフが名古屋空襲などを学習して自らを高めることができました。一方では、「語り手の会」会員が戦争体験手記を残す活動を進め、他方では一般名古屋市民の「空襲」体験手記の募集に21点の投稿を得ました。

また、世界の空襲の歴史を学ぶため、前田哲男氏にご講演をいただきました。名古屋空襲より前に、ヨーロッパで起きたこと、日本が中国で行った空襲などの理解を深め、展示や「語り」の意義を再確認することができました。

- ⑤ 「語り継ぐ私の戦争体験」の発刊 よせられた「語り手の会」会員の手記18点名古屋市民の空襲体験手記21点をまとめ、「語り継ぐ私の戦争体験」を10月に発刊しました。B5判91頁で400部印刷し、会員、寄稿者、ボランティア、支援者、マスメディア、県・市、学校、公共施設などに配布し「戦争体験」を広く知って頂くことができました。また、活動にご理解下さり館のサポーターになって下さる方々の輪をひろげるのに役立てることができます。また、ある大学からは、教材として使いたいとの申し出を頂いています。

【参照 冊子「語り継ぐ私の戦争体験」】

- ⑥ 会員の手記の内訳 軍隊・戦場体験6点、空襲体験5点、学童疎開と学徒動員5点、その他2点でした。市民の体験手記と合わせると、空襲に多くが集ま

っています。軍隊・戦場体験が少なく、空襲体験、学童疎開と学徒動員が多いのは、当時兵役経験者が既に少なくなっていて、銃後にあった児童・生徒の年齢層が語り手の多数を占めていること、戦場体験者の中には、いまだ体験を語り得ない人びとがいる、という事情があると思われます。そうした事情を考慮すると、このネットワークの存在価値は高いものと言えます。

- ⑦ **実物資料の整備・活用** 多数ある空襲に関する手記の殆どに、防空壕に逃げ込んだ記述があります。65年を経過して、家庭用防空壕がいまでも残存していることはまずないでしょう。当時都会で最も普及した小型の防空壕（6尺×3尺）の縮尺1/3模型を当時の要領書を参考に制作しました。空襲警報発令時には、急いで入り指で目と耳をふさいで、警報解除までの間3～4人が肩寄せ合って避難したものです。半地下構造で爆風には比較的強いが、近くに落下した焼夷弾には役に立たなかったとも言います。70歳未満の人びとにとっては、初めて見るものでありましょう。

また、名古屋市中川区の中村呑海氏から、空襲をテーマにした作品募集に、「アメリカの焼夷弾がつくった作品」として「天井の穴」を寄贈するとのお申し出をうけ、移設をおこないました。これは他に例がない一次資料であります。

ピースあいちには3千点余りの戦時中の実物資料があり、これを利用しながらの語りは、他に例がすくない語りとなりえます。こうした実物資料を見ることによって、「語り」の内容理解が容易になると言えます。防空壕の制作、「天井の穴」の移転は貴財団のご助成ですることができました。

【参照 末尾掲載の写真】

【参照 朝日新聞 10.5.19 記事 空襲から平和を考える】

【参照 中日新聞 10.5.23 記事 焼夷弾貫通 焼け焦げた天井】

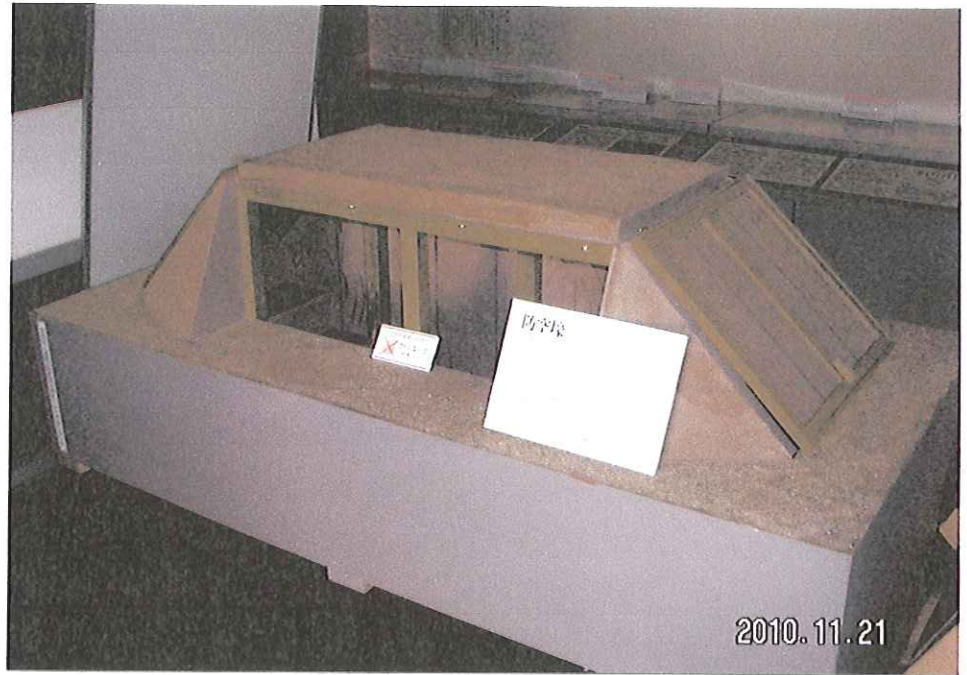
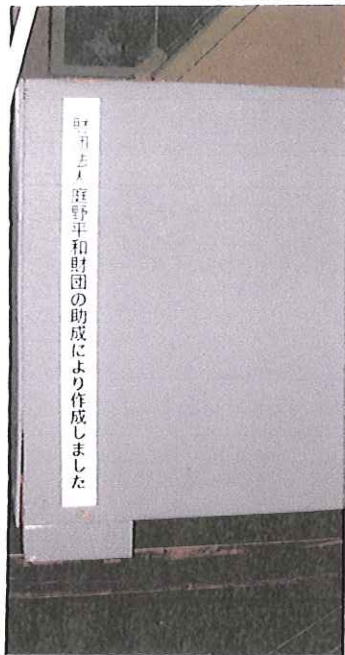
- ⑧ **来館外国人の反応** 2010年5月4日 日韓高校生平和特派員が来館した。韓国高校生が残したメッセージを紹介します。
- Aさん「日本は義務兵制ではないので、羨ましかった。戦争によって被害を受けた民間人がかわいそうだった。戦争の怖さを改めて知ることができた。これから戦争は起きないでほしい。」
- Bさん「我が国の戦争についてだけ勉強し、我が国のことしか知らなく、日本のことがとても好きではなかったが、博物館にきて日本も同じく大変だったということを知った。日本は、分断国家でもなく、憲法を定めて平和を守ろうと努力している姿勢をみて、羨ましく、すごいと思った。」
- Cさん「これまでは、我が国を支配したこと以外に日本をあまりよく認識していなかったが、日本も他国から攻撃を受け、大変だったということが分かった。今回のきっかけで、過去の戦争や植民地時代に関する認識が大いに変わった。」

9月14日に来館した米国人元捕虜のメッセージ。「戦争について語り素晴らしかった。捕虜の記憶を忘れることはできないが、区切りをつけ、和らげる機会になった。」

このように、互いに事実を知ることが大変重要であると、確認できました。また、その後來館されたイラクの方から「加害者であったことを自ら認める展示に、日本人の徳の高さを感じた」という評を頂いています。戦争では双方が必ず加害者になるのであり、互いに自らの加害行為を認めあってはじめて信頼がうまれることを確認できました。

⑨ 朗読会の開催 8月7日に「愛知の空襲を読む」朗読会を開催しました。朗読は緑風の会の「名古屋空襲」「豊川工廠」と俳優の天野鎮雄氏の「捕虜の居た駅」でした。内容の重みを感じ取れただけでなく、「語り・語り継ぎ」の技の向上にもおおいに参考になりました。68名の参加がありました。

(文責 河原忠弘)



(上)  
小型防空壕  
縮尺1/3の模型  
(覗けるように前面が  
空けてある)

(右)  
アメリカの焼夷弾が  
つুক্তた作品  
「天井の穴」

